

書叢藝文

薩摩琵琶歌

町田 桜園 編

253

575

074602-000-7

特63-623

薩摩琵琶歌

町田 桜園 / 編

M40

CEJ-0059



特63
623

(1)

言

序

序

言



四つの緒の調へ、
 心は、
 地生するべし、
 大いなる
 事を祈るもまた、
 盡忠の一端か、
 阿々

真如の月の澄むが如く、
 慷慨悲壯の歌を聞くの時、
 現下



明治乙巳初春

編者識

●薩摩琵琶

薩摩琵琶が近年の如く玩さるゝに至りしは、一はその調の悲壯慷慨にして最も青年の嗜好に投せしと、一は日清戦役より續いて征露膺懲の軍ありて一般に柔懦なる歌曲を好まざる傾向を來したるに因りてなるべし。

由來薩摩武士が全日本を通じて勇猛なりとの評を與ふるに至りしに就ては、その原因も種々あるべしと雖も、面もその要素の中には彼等が玩し音樂の器即ち薩摩琵琶てふ尙武的樂器の力もまた與りし事を忘るべからず。

抑此の樂器は形稍彼の平家琵琶といへるに似て稍小形なり、絃は四にして撥は平家より大にして、その形半開の扇の如く、材は楚揚木を以て造るなり、近來その頭を現せし筑前琵琶もまた大同小異なり其昔血氣の薩摩隼人は此の器を弄びつゝ戶外に散歩せしといふ。

此の樂器が如何にして薩摩の國に彈せらるゝに至りしか今その由來を尋ぬるにその昔島津忠久公薩摩、日向、大隅の三ヶ國を給り薩摩の國に下向したる時、鎌倉に於て天下の御祈禱をなし、寶山檢校といへる天台宗の僧を伴

ひ下りたり、此の檢校は同國阿多郡伊作中島に住し常に琵琶の妙曲を奏し口には地神の經文を誦し、國土安穩の祈禱をなしたりといふこれ薩摩琵琶の濫腸なりといふ。爾來幾多の星霜を経て此の樂器愈々人々にもてはやされ遂には琵琶會を催すに至りぬ、その會は一切婦女子を交す酒肴を用ひず、夜に入れば鶏肉を料理し、所謂薩摩料理を食ひつゝ且彈じ、且吟じ。甚だ清淨潔白なるものなりしといふ。

◎吟者の心得

薩摩琵琶てふ樂器既に述ぶるが如きものなれば、吟ずるに當りても他の俗歌端唱の如く喉のさきにて美音を發せんことを務むべからず謠等の如く下腹に力を入れ腹の底より出づる如き力ある聲を出すべし。淨瑠璃等の曲にも然あるべき如く、琵琶にありても吟ずるに當りて能く歌想をその聲調に現さるべからず、即ち悲痛なるべき時には聲調をして沈むが如く痛むが如く發し、崩れと稱して勇ましき歌には迫るが如く進むが如くに壯裂の氣を以て吟ずべし。

| | | | | | | | | |
|-------------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|--------------------------------------|-------------------------|-------------------------|----------------------|-------------------------|
| ○ 笠 <small>かさ</small> | ○ 春 <small>はる</small> | ○ 城 <small>しろ</small> | ○ 蓬 <small>ほう</small> | ○ 俊基朝臣東下 <small>としもとあそんあづまくた</small> | ○ 同 <small>おなじく</small> | ○ 同 <small>おなじく</small> | ○ 木 <small>き</small> | ○ 同 <small>おなじく</small> |
| 置 <small>ぎ</small> | の | | 萊 <small>らい</small> | り | 三 <small>さん</small> | 二 <small>に</small> | 崎 <small>さき</small> | 二 <small>に</small> |
| の御夢 <small>のみゆめ</small> | 調 <small>しらべ</small> | 山 <small>やま</small> | 山 <small>さん</small> | 段 <small>だん</small> | 段 <small>だん</small> | 原 <small>はら</small> | 段 <small>だん</small> | |
| | | | | | | | | |
| 二五 | 二五 | 二三 | 二二 | 一四 | 九 | 六 | 六 | 六 |

| | | | | | | | | |
|----------------------|-----------------------|------------------------|----------------------|-----------------------|-----------------------|-------------------------|-------------------------|------------------------|
| ○ 小 <small>こ</small> | ○ 國 <small>くに</small> | ○ 錦 <small>にしき</small> | ○ 吹 <small>ふ</small> | ○ 石 <small>いし</small> | ○ 臺 <small>たい</small> | ○ 同 <small>おなじく</small> | ○ 同 <small>おなじく</small> | ○ 扇 <small>あふぎ</small> |
| 敦 <small>あつ</small> | | の | 雪 <small>ゆき</small> | 童 <small>どう</small> | 灣 <small>わん</small> | 三 <small>さん</small> | 二 <small>に</small> | の |
| 御 <small>み</small> | | の | | | | | | |
| 盛 <small>も</small> | 船 <small>せん</small> | 旗 <small>はた</small> | 敵 <small>てき</small> | 丸 <small>まる</small> | 入 <small>いり</small> | 段 <small>だん</small> | 段 <small>だん</small> | 的 <small>てき</small> |
| | | | | | | | | |
| 五七 | 五 | 五一 | 四 | 四 | 三五 | 三〇 | 二七 | 三 |

や。櫻さくらの散りてこそ、榮はえあるなれと勇たつ、心ぞ國くにの華はななれ



臣おみの分ぶん定さだまりて、幾千百の年としを経れど、日ひの御影みかげの曇り

町田 櫻園 纂

目 録 (終)

平吟 知るや知らずや敵露西亞、今尙ベテル大帝の偉業を
夢み、貪婪の劍をとぎて、東洋に無謀の兵を起したり、
世界の人は云ひたりと、いかで日は本敵し得ん、あはれ
一舉に微塵たらんと、敵はもとより其の心、さてこそ三
十有七年まづ戦端は、如月八日仁川にこそ開かれたれ。
高吟 果して日本は微塵たりしか、強大ほこる敵國の、數
多の軍を陸に海に、うちてこらして日の旗の、光はいよ
い輝きぬ。

ユリ 國小なりと云ふ勿れ、四千餘萬の國民の、心は忠義

の血に燃ぬ、親には別れ最愛の妻子に離れ、身を捨て、
生ては再び歸らざる大和魂知らざるか、いでや進まん進
みてぞ敵を追ひ撃ち、攻め立て、烏拉の山を越り行きて、
長驅露都にぞつき入らん。
高吟 等しく勇む軍人の、たつる功績を諸共に、世界に輝
く日の本の、國の光は幾千代もかはらず盡さず、榮かぬ
なむ。
實にも日出度き國なれや。

● 軍 神

神

横井忠直作歌

低吟「七度この世に生き更り、朝廷の敵をたやさんと、云
 ひしは楠公兄弟の、ユリ」最後の際のちかひなり、此語に
 感じ吾も亦、七生國に報せん」と高吟「志操固めしその人は、
 海軍中佐廣瀬君、ことし旅順の攻撃に、港口閉塞ためさ
 んと、決死の勇士を糾合し、沈むる船の長となり、龍の
 あざとを探るにも、虎の口髯なぶるにも、劣らぬ危険を
 衝き冒し、従容任務を果したり、

ユリ「されど成効いまだしと、再び其の擧を懇請し、敵の
 航路に深く入り首尾よく目的達したり。
 歸るに臨み一人の、部下見ねずして二度三度、すてたる
 船に立ち返り、浪をふむまで捜したり。
 高吟「船はや沈み果てんとす、今は是非なし是迄と、涙を
 揮ひ歸途に就く此の時敵彈雨霰、數多の士卒を損せじと、
 身をもて蔽ふ一刹那、一丸鋭く掠め去り、遺るは少しの
 皮肉のみ、あな悼ましや春の夜の、つれなき嵐に散る櫻、
 智仁武勇を兼備せし、日本益荒男失せにけり。」

ユリ「是日は彌生の末七日、鬼神も泣き天地も、慘憺とし
て此の恨み、いつの世にかは盡さぬべき、後半ヶ月旅順
口、又我が軍に襲はれて、提督マカロフ以下千餘、旗幟
と共に沈没す、斯る勝利は前日の閉塞あづかり力あり、
また敵軍の運命を、中佐の靈もや誘ひけん。
七生報國ちかひてし、その徴證まづ現れぬ、尙忠魂は此
後も、とはに皇國を護るらん。

高吟「嗚呼その志操その行爲、實に軍人の模範なり、千秋
萬古語りつぎ、無數の廣瀬世々出でむく。

● 花

橘

低吟「明治三十七年の夏も半の水無月末、敵將黒鳩公が雄
を決せんと構へたる遼陽城を陥さんと、三軍均く打向
ふ、ユリ「勇氣は天を衝かん計り實に神州男兒なり、され
ども敵は此處にこそ、我が軍勢を扼せんと侮り難き防備
の狀破り難くぞ見ねにける。

平吟「岳南聯隊長關谷大佐は鋭くも、首山をさしで
攻め寄する、そが先鋒は大隊長少佐橋周太君、一隊の兵

低吟ユリ「かくと見るより内田軍曹、此處にありては危か
らん、いざ退きたまへやと勸むる詞を却けて、いかに敵
勢強くとも一度取りし此の地をばいかでか敵の手に委せ
ん、殊に此日はかしこくも、皇太子殿下の御誕辰、か
る目出たき吉日に、不覺を取らば如何にして再び國に歸

高吟「少佐は聲を張揚げて、退くな者共恐るゝなど、烈し
く兵を麾けど、今は残れる兵とても僅に數ふるのみなる
に、少佐の身邊右左、飛び來る彈丸に當りけん、血は軍
服をうるほしぬ、

引き連れて進めくと下知をなし、シヤオヤンズイの高
地をば占領せんと進み行く。
獅子奮迅の勢に、進めど敵も頑強に、我先鋒を苦むる、
彼我の打出す砲彈は、クツレ「山岳震ひ乾坤摧け、漲りの
ぼる硝煙の、下に倒るゝ猛將勇士、されども決死の我が
兵は味方の死屍乗り越わく、高地に一度は乗入りて、
今はと見わし其の折に、多くの敵勢逆襲し、少佐の隊に
突進む、如何に勇氣の我が兵も衆寡は遂に敵しかね、彼
方此方に倒れ伏す、

られんいいでや尙進まん進めよと太刀取り直す程もなく、
 高吟「またも飛び来る彈丸は少佐が胸に命中す、勇は鬼神
 を欺むくべき勇將桶隊長も撞とばかりに倒れけり、軍曹
 見るより走り寄り、少佐を抱き後方へ退く折に一丸はま
 たも飛び来て、軍曹に擦過傷をも負はしめぬあな痛まし
 や橋の花はこゝにて散りてける、されどもその名は軍神
 と千秋萬歳竹帛に留めていよ、傳らん。

● 旅順の開城

平吟「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず
 とかや、されば露西亞は清國より、租借を名として奪ひ
 たる、旅順口の要塞に、堅牢無比の砲臺を、到る口々山
 々に、連ね築きて今はしも、難攻不落と誇りたり。
 高吟「ユリ」恨は積る十歳の、昔の敵今こそと、大和武夫が
 打ち向ふ攻圍の軍の指揮官は、乃木大將とこそ知られた
 れ、既に南山の險を陥れ、ダルニー港も手に歸しぬ、今
 はと向ふ砲臺に、敵も防備の手を盡し、鶏冠、二龍、松
 樹山、盤龍山に我軍をいたく苦め惱したり。

クツレ「死を鴻毛の軽さに比し、義を金鐵の重さにくらべ、
一死報國忠勇の、わが武者も今はたゞ攻め寄せ難く見
たりき。

されど如何でか撓むべき、夏去り雁の音信に故郷を忍ぶ
程もなく、早くも來ぬる冬の空、攻圍の工事着々と効を
奏して一壘より、また一壘と我手に入る、それだに敵は
屈せずして、日々夜々に砲彈の、雨とこそ降れ我軍を、
撃つ勢の悔りがたく見わたるき。

クツレ「今は一舉に乗取れと、全軍進み激しくも、攻め寄

せたりな寄せたりな、吶喊の聲地に震ひ、砲聲般々天に
響く、乾坤摧け地維さくる、すさまじかりし激戦の、効
を奏して占め得たり、二百三高地の占領に、港内に潜み
居たりし敵艦は、何れも我が彈丸に、致命の傷を負はさ
れし最後の様のあはれなる、ユリさしもの敵も力つき、
今はと許り開城の、請を容れてぞ日の御旗、幾數十の砲
壘に、かゝりやき昇る勇しき、萬歳三呼の聲こそは、響ぬ
方もなかりけれ。

● 常 陸 丸

平吟「茲に六月十日過ぎ、我忠勇の軍隊を、送らんものと
數隻の、運送船は船出せし、中にもおもき常陸丸、六連
島も早すぎて、ユリ沖の方より八哩、南の方を走らせし、
折しもあれや忽然と、濃霧を排してあらはれし、二隻の
露艦近きて、はや打ちかくる彈丸は、霰とや見ん雨と見
ん、あないたましや數十の、武夫の血は甲板を、からく
れなるに染めなせり。
クツレ「心矢竹にはやれども、我に敵する力なし、いで潔き
最期をと、言ひ合さねど人々が、海に飛び入り腹を割く。

低吟「中にもあれや須知中佐、怒れるまなじり朱を注ぎ、
憎き敵のふるまひや正しき戦ひなしもせで、弱きを挫く
奸賊は、そも文明の強國と名に負ふ國の所爲なるか、我
はこゝにて死すとても、我が靈魂は末長く、御國の仇も
つくさなん。
ユリ「怒れる顔をふり向けて、大久保少尉が捧げたる、聯
隊族をば見るにつけこれこそ 朕が俤をとのたまはした
るその御旗、いまだ一度も戦場に、ひるがへす間もあら
浪に、沈めむ事の無念さよ、さはいへ敵の手に委さば、

末代までの恥辱なり。涙をふるひ焼きすてし、中佐の胸
や燃ゆるらん。

高吟「かくて思ひ残も事もなし、せめては敵に一弾をと、
銃取直す武夫の、かしこに此處にたほれたる、その亡骸
ぞ果敢なけれ、今はとばかり立直り、中佐はピストル取
上げて、船と運命共にせし、恨は深し支海の、波もいかに
るか音高く、折からしげき五月雨は、勇士の跡を吊ふか、
いともあはれに注ぎつゝ、泣く音血を吐くほとゝぎす、
魂はいづちに迷ふらんく。

迷ごもどき

低吟「迷ふが故に三界は暗し、一心悟れば十方世界は廣く
して、地獄の餓鬼も我に有り、佛も衆生も他にあらず、
高吟、ユリ「佛とは何をいは間の苦衣、只其儘の姿にて、慈
悲より外の宿心はなし、諸事何事も腹は立つとも言葉の
こせ、言葉少なく品多くして、濁る心を速やかにして、
いつも人には情けあれ、なさは人の爲めならず、平調
「廻り廻りて小車の、後は我身に向ひ來ると、聞くにぞ懸

まるゝ人には猶ほもよし見よ、後には深き友となる、仁
 者に敵なし、されば古人の言葉にも、聖人は人をそしめ
 ず、大海は塵をわらばず、善悪は友にこそ、我々が良き
 に人の悪しきは無きものよ、友は鏡となるものをかし、
 老も若きも悪しき心を捨て見よ、何處の里にも住みよか
 るべし、皆人の彌陀頼む心は西へうつせみのぬけはてた
 る身こそやすけれ、

川 中 島
かは なか じま

平貞、天文二十三年秋の半の頃かとよ、上杉謙信は八千餘
 騎を隨へて、川中島に打て出づ、我今度の戦は、武田信
 玄を追詰めて、親しく雌雄を決せんと、うづまさかへす
 犀川を、渡りて陣をぞ取りにける、信玄は此の事聞より
 早く二萬餘騎にて打ち向ひ、壘を堅めて戦かはず謙信は
 氣をいらち、村上義清に云ひ含め、日陰暗き山々の彼方
 此方に兵を伏せ、木杣を似せし勇士を出して、甲斐の陣
 營に近づかしむれば、クツン「甲斐の兵策事とは露不知、
 朝霧の間に追ひまくる待ち設けたる伏兵は、時こそ來れ

と鯨鬩をどつと上つ、打向ひ袋に物を取るが如くに一騎も残さず打取りたり高吟、ユリ「信立怒かつて軍を雲霞の如くに送り出せば謙信も備を立て、打向ひ入亂れ人亂れ攻め戦かふ龍舞て雲を起し虎嘯きて風を呼ぶ破竹の如き勢に入亂れ入亂れ攻め戦かふ其の有様暴風うづまき百雷岩を突くに似たり、越後の軍退けば、甲斐の軍之を追ひ、甲斐の軍退けば、越後の軍之を追ふ、其の兵を合する事十有七度、何れを勝と知らま弓、平吟「信立は一手の勢の旗を伏せ、河を渡りて葦の草、此の間を潜ませて謙信の

旗幟近く進みより、をもてもふらず切て入る、クツレ「謙信の麾下の兵は思はぬ敵に襲はれて走る後よりも甲斐の勢関をつくつて追かくる、宇佐美定行之を見て、虎狼の如く怒り我手の兵に下知をなし敵の横間よりむにむさんに突き入りて、淵瀬も云はさず追ひ落す、信立は度を失ひ、流を亂して逃げる後より謙信只一騎赤栗毛の逞ましきに鞭をあて、何處迄で逃ぐるかと云ひも敢へず切り附くる、信立は之を援ふ暇なく、軍扇にて受けたれど扇は二つに割れたり、

平吟、ユリ「降ると見て傘取る暇も無かりける

川中島の夕立の雨

早や二度の太刀は信玄の肩先に切込ぬ、あつと云ふ間に
信玄の命は岩にくだけて泡と消へなんあやうきを、救は
んとすれども水瀬早やくして近よれず、部将原大隅鎗を
上げ、只一突きと突きはしたれどあたつきの如斯ては叶
ふまじ、只一打ちとなげたれど、馬に当たりて馬逸す、
謙信は馬を静めんと、手綱かいとる其暇に、信玄は虎口
を逃れて去りにける、

鞭聲肅々夜河渡

曉見千兵擁大牙

遺恨十年磨一劍

流星光底逸長蛇

如斯信玄を打ちもらしたる謙信の低吟「心の中は幾何なら
む思いやるだに哀れなり、信玄は肩の痛に絶へかねて、
其の夜の中に軍勢をまとめて歸る月影の、道を求めては
るばると、我古郷に歸りける、我古郷に歸りける。

扇の的初段

平吟「屋島の内裏の方なる牟禮高松の在家にあたり、火の

手有りと言ふ程に、見る見る四方に廣がりて、黒煙天を
 こがしけり、阿波の民部大音を揚げて、今の火の手は手
 過にあらず、敵より火を掛けたりと覺ゆるなり、軍の用
 意せよと走せ廻る、時に元暦二年二月二十八日、まだ東
 雲の程なれば、城中俄かに騒ぎ立ち、上を下へと返しつ
 づ、制止も聞かで混亂し、主を捨親を願りみず、我先に
 と逃迷よふ、斯る時に源氏の大將九郎判官義經は、紺地
 の錦の垂直に、紫裾濃の鎧小鍬形打たる白星の甲の尾を
 しめ、紅の母衣懸て二十四指したる小中黒の征矢を負ひ、

重藤の弓に金作の太刀を佩き、黒き馬の太く逞ましきに、
 白覆輪の鞍を置き、畠山重忠熊谷直實平山季重土肥直平
 佐々木高綱其外宗徒の郎黨を引具して、城の追手に寄せ
 來り、木戸の内目掛けて切て入れば、クツレ「平家方に於
 ては音に聞へし越中の次郎兵衛盛繼、上總の悪七兵衛景
 清等切先き揃へて打て出で、追ひつ捲りつ受け流し、鎧
 ぎを削り鏑を破り、火花を散して攻め戦ふ組て刺違かふ
 者も有れば眞甲切割られて倒るゝ有り、手負を助すくる
 暇まなく死體をあぐる隙もなし、牟禮高松の黒煙は、水

第く〜に追ひ來り、既に矢倉も落ちたれば、平家も今は
 是迄と、各皆船に打ち乗りて、沖を遙るかに漕ぎ出でぬ、
 低吟「行方定めぬ波の上、須磨や明石の浦々も寄るべもな
 き捨小舟をきふしなれも知らま弓、いつしか今は引きか
 へて、今日の味方も明日は敵、敵か味方か矢と楯が、淵
 瀬しらの舟の中、心細くも帆を揚げて、風に任かする身
 の上は、思ひ知られて哀れなり、平吟、ユリ「爰に平家の陣
 中より、花やかに飾りたる一葉の舟、沖に向ひて漕ぎ寄
 する、頃は二月廿日の事なれば、霞みも風に打ちなびき、

柳の正重に紅の袴着て袖笠被ける女房有り、日の丸の風
 をに杖插み、舟の舳頭に指し立て、是れを射よとぞ招
 きける、ユリナガシ「此の女房こと建禮門院の後立の時千人
 の中より撰まれたりし、玉虫の前舞の上手と聞へけれ、
 歳は今年十九歳、雲のびんづら霞の眉、姿貌に至る迄、
 繪にかくとも争でか筆に及ぶ可き、折節夕陽の映きてい
 とど色こそ増しにけれ。

平吟鬼おにを欺あざむむく丈夫は互たがひに、生死せいしを争あひて、船ふねと陸りくとに
 立ち分わかれ、弓矢ゆみやたばさみ拳こぶしを握にぎり、にらみ合あひたる折まに
 しも、あな面白おもしろの最色さいしきやと人皆ひとみなともにいひはやす、ユリナ
 ガシガシをいろ浮うき立つ人心にんじん、波なみも玉散たまちる海の面おもて、花はなに霞かすみの
 別わかれ來きし、都みやこの春はるのことなども、思おもひ浮うべて眺ながめつゝ、
 判官はんくわん之のれを見給みたまひて、畠山重忠はたけやまのちゅうしゆを召よされ如何いかに重忠ちゅうしゆ、波
 の扇射あふせよと云いふに射やすして置おくも無念むねんなり、汝なんぢ一矢いちしやに打うち
 落おせと有ありければ、重忠ちゅうしゆ畏かしこまりて君きみの仰家おほせいへの面目おもて、此こゝの上
 無なき事ことと存ぞんずれど、之これは由々ゆゑ敷しき晴はれの術じゆつなり、重忠ちゅうしゆ

打物取うちものとりてなら、鬼神きじんと云いへど更さらに辭退じたいは仕つからねど、弓矢ゆみや
 の藝げいはつたなく候まへば、もしも射損あそんして敵たかの笑わらを受け候ま
 は、重忠ちゅうしゆの恥ははさる事ことなれど、源家げんけ一族いちぞくの御瑕瑾ごあざなと存ぞん
 ずるなり、低吟ひげんをそもそも下野國しもつけのくにの住人すまひ那須なすの太郎助宗たろうすけむねが
 子こ、十郎兄弟じゅうぢょうけいは弓矢ゆみやの達人たつじんと承うれば、箇様かやうの小物せうぶつに賢か
 く仕つからんと申まし上げれば、直ただちに十郎じゅうぢょうを召よされける、十
 郎畏かしこまり、御誼ごぎの上うへは仔細しさい申ます可べく候まはねど、去年こぞ一の
 谷坂さか落おしの時とき、馬弱うまじやくくして、弓手ゆんでの臂うでを砂すなに突つかせ侍はべ
 りしか、庇きりなほいわずして、定さだの矢仕やじるべくも候まはず弟あに

與一宗高は一定仕り候はん仰付られ候へと弟にぞ譲りける。

三 段

平吟「宗高其の日の出立ちには、紺むらさめの直垂に、緋威の鎧着て、鷹角反甲猪首に着なし、二十四指したる中黒の矢を負ひ、重籐の弓を持ち、赤銅作りの太刀を佩き、さびかすげの馬の逞ましきに、洲崎に千鳥の飛散たる具鞍置てぞ乗りにけり、判官の召に従ひ、馬より下り、甲

を高紐に懸けて畏まる、ユリ「判官申されける様、波なる扇仕れ、晴の所作なるぞよ不覺すな、と宗高承り、仔細申さんとすれば、伊勢の三郎後藤兵衛など、面々の故障に日も早暮れんとす、兄の十郎さし申上たる上は仔細申すまじ、海上暗くならばゆゝしき味方の大事なり、疾々急ぎ玉へと言ひければ、宗高せん方なく甲を童にもたせ、烏帽子引立て、薄紅梅の鉢巻して、手綱搔ひくり扇の方へぞ向ひける、ユリナガシ「生年十七の若武者なれば、色白くして小髭生ひ、弓の取り様馬の乗姿優なる男子と見へ

にける、波打際に打寄せて見れば、弓手の方には主上を
 初めと奉り、國母建禮門院の北の政所二位殿官女其の外
 船を漕ぎ並べ、櫻梅桃李と飾り立て、屋形の前後御簾も
 凡帳もさゝめきたり、妻手の冲には平家の大將軍大臣殿
 を始めとし、平大納言教盛新中納言知盛以下、平家の一
 門其餘の諸將、居並びて數百の兵船を乗浮べ、鎧の袖
 を列ねて是れを見る、高吟ユリ「後の方には源氏の總大將
 九郎判官義經を始めとし、諸大將に至る迄、各々騎を乗
 揃へて、拳を握りかたづをのみ、鳴を静めて音もなし、

遠近皆遠淺なれば、鎧の菱縫は板鼓瓜の濡るまで、打れ
 てはやりにはやるが我が騎を手綱ゆりゆり静むれど、寄
 する小浪に物懼れ足も止めず、狂ひける、沖の方見渡
 せば、間は七段ばかり隔てたり、折しも西風吹來り、舟
 は波間に漂ひて、扇も事に定まらず、風の間にくゞ廻り
 げる宗高運の極りと眼を閉ぢ心を静め、低吟「南無八幡大
 菩薩別けて下野國宇都宮那須大明神弓矢の冥加有るなら
 ば扇の座席を定め給へ源氏の運盡き家の果報も是れまで
 なれば、矢を放たぬ先に海中に沈め給へ」と心に深く祈念

いて、眼を開き打見れば風も少しは吹き弱り、扇も座席
定まりぬ、偕ては神の力差添賜へるか、我が物なりと思
ひつゝ、矢先の面の日の丸は、日を射るの恐れあり、要
のほとりを射切らんと、心を静めて切り放なつ、其矢海
上遠く鳴り響き、狙ひ違はず要より、一寸ばかり上を射
切たり要は、舟に止まりて、扇は空に舞ひ揚り、暫しか
ほどにさまよいて、海中へとぞ落ちにける、折節夕日に
輝きて波に漂ふ有様は、ユリナガシ「立田の山の秋の暮、初
瀬の紅葉」ことならず、源氏は鞍の前輪を叩き籠をたゝ

き、平家は舩を折ち鳴らし、どつと揚げたる鯨波の聲、
山も崩れて海も湧くばかり、暫しは鳴りも止まざりける、
高吟「嗚呼宗高が此の日の譽れ、幾萬年を経とても朽ぬ程
こそ目出たけれ。」

● 臺 灣 入

平吟「皇の御稜威は四方も輝きて、清國遂に和義を乞ひ、
臺灣島を獻納し合戦茲に治まれるユリナガシ「君が御代こ
そ目出度れ、臺灣島の土賊等龍車に向ふ、螭螂の斧を振

ふと聞へしかば、征討の師をぞ遣はさるゝ、近衛兵の精
兵を率ひて、御渡海遊ばせしは陸軍の中將大勳位北白川
の宮と、金枝玉葉の御身なり、平吟三貂角の御上陸、幕
營ありし其の跡に、木を削りてぞ印るさるゝ、炎熱燃ゆ
るが如き日も、三貂大嶺の險をば馬にも召されず越へ給
ひ、大雨しきりに降る時は、濡れにぞ濡れて進まるゝ、
士卒も之れに感激し、病兵さへも立上り、命を惜まず進
軍す、クツレ「諸所の砦に籠りたる賊兵等打出す彈丸は、
雨か霰れか白雪の降り注ぐが如くにして、砲煙暗く天を

覆ひ、百雷等しく落つるに似たり、宮は石矢を犯しつゝ、
突撃せよとの命令に、川村少將小島大佐を前とし、勇み
立ちたる近衛兵、我先きに突進して、敵の本營に突て入
る、賊之れに氣を吞まれ、右往左方に逃げ散りて降参す
る者數知れず、大砲小銃の戦利品山をもつかんばかりな
り、宮は此の時悠々と、基隆城に入らせ給ふ、低吟「斯く
て六月十日には、臺北城を落入、七月には新竹城を占領
し、明る八月には彰化臺灣の兩府を定め、十月の初め方
臺南さして進まるゝ、天暑くし瘡癆多く、地嶮しくして

糧道絶わ、千辛萬苦の其の中に、宮は士卒と集を分ち盡
は汗馬に鞭をあて、夜は亂野に露營して、只國の爲め君
の爲め、平定の策を廻らし給ふ、ユリナガシ「嗚呼御痛しや
悲しやな、竹の園生の御身にて、餘りに辛苦を積ませら
れ遂に御病氣に罹らせ給ひ、日々に重らせ給ふ様、御供
の人々打ち驚き、都に歸らせ給ふ様、切に御諫め申せど
も、宮はいつかな聞し召れず、ユリ「我官軍の將として、
賊等平定見ぬ中に、例へ我身は臺灣の土となればとて、
士卒のみ打ち捨て如何で都へ歸るべき、籠に召されて進

まゐる、御臨終の其の際に賊徒平定と聞召し、宮は莞爾
と打笑みて、唯萬歳とばかりにて、敢へなく天に登り給
ふ、傳へ聞く日本武の古來を、今日の前に見參らせて、
國中の民も勇士も慟哭せぬはなかりける、去りながら昨
日今日とは思はねども、老弱不定に貴賤なし、唯人は名
こそ惜しけれ皆人は名を後の世に残せかし。

臺北融々仁政成

皇軍臻所涌歡聲

旭光將被臺南地

殲破土魁安萬世

と宮の吟ひ給ひし如くにて盛功偉烈後の世に、輝き渡る

なれば、母を麓ふもとに残し置き、是非せひ無く石童いしどう只ひと獨り、杖を
 たよりにたよたとよと、心細こころはほそ道踏別ちぢみけて、ユリナガシ「峰たかねの藥
 師しや、瀧不動たきふどう、手を合せつ、伏拜ふしおがみ、其の夜は其處そのところに假かり
 寝ねして、笠の屏風びょうぶに草枕くさまくら、諸行無情しよぎやうむじやうを告げ渡る、鐘かねの音
 いとい身にしてみて、九百九十くひやくじゅうじゅうの寺々てらざらや、峰谷たかねやま々の阿彌陀
 佛ぶつ、菩薩ぼさつ、念ねんじて尋たづぬれど、父ちちぞと思ふ人はなし、三日
 二夜ふたよ早はやや過すぎて、麓ふもとの母を案あんずれば、後のちろに引ひかるゝ心
 地ちして、無名橋むめいばしに差掛さかる、平吟ひらぎん「左ひだりに珠數じゆずを右みぎに花はな、高明こうめい
 眞言唱しんごんとなへつゝ、刈萱道かりかやどう心降こころくだり坂さか、見上みあげ見下みくだろす顔かほと顔かほ、

ぞ有あり難がたき、北白川きたしろがはの水は逝しきて歸かへらねども、月影つきかげ永とこく澄すみ
 み渡わたり、光ひかりは世よ々に流ながるらん。

● 石 童 丸

低吟ひげん筑紫つくしの大守名のだしなも高たかき、加藤左衛門重氏かとうざゑもんぢゆうぢは、無情むじやうを感
 じ世よを捨すて、諸國修業しよこくしゆぎやうに出いで給たまふ、残のこされたりし妻つまと子こ
 は、思おもひ待まちつ事こと十餘年じゆねん、父上高野ちちのやまに有ありと聞きき、石童丸いしどうまる
 は母上ははのやまと、菅すげの小笠こがさを傾かたむけて、旅たびの疲つかれもいとひなく、
 漸おそく高野たかねの禿宿かむろ、明日あしたは逢あはんと悦よろこべど、女人禁制おんなきんせいの山

石童丸の振袖と、高祖の袖ともつれ合ふ、其の時袖に取
 すがり、若しこの御山にて今道心ましまさば教へて給へ
 と乞ふ姿、見れば一人の幼兒が、腰に差したる脇差も、
 見覺へのある顔せに、高吟「扱ては不思議とおもへども、
 さあらぬ體にもてなして、石童丸に申す様、たづぬる人
 の名を書きて、札場に立れば逢ふことも、有らんと聞て
 泣き沈む、石童丸を刈萱はあはれみ給ひ手を取りて、己
 れが住處に連れ歸り、國は何國名は何んと、問はせたま
 へば涙だぐみ、國は筑前松浦の、加藤左衛門重氏が忘れ

形見の石童丸と聞て、刈萱胸切まり、せき來る涙だ止め
 敢へず、石童其れとさとりしか、若し父上にては御在さ
 ずや、名乗り給へと云ひければ、高吟「あらなつかしや
 我子かと、言はんとしては名乗り兼ね、其の刈萱は昨年
 の秋、空敷なりぬと云へば、又も石童わつと泣き、せめ
 て墓場を教へ給へと請ひたれば、刈萱墓場へ連れ行ささ
 して、これぞ父の墓なりと、低吟「聞て石童泣きたをれ前
 後も不知歎く様、後ろに佇む刈萱は胸も張裂く計りなり、
 暫時有りて漸くに、石童丸を抱き起し、涙は佛の爲めな

らず、一度此御山下りて母上に此の事云ふて、回向せよ
と、諭されければ石童泣々山を降りつゝ、母に告げんと
来て見れば、哀れなるかな母上は、石童丸を待ち兼ねて、
麓の野邊に枯れ果つる、葦葉の露と消ね給ふ、高吟ユリ「嗚
呼父上には生別れ、又母上には死に別れ、天にも地にも
便なく、後にたよるは姉ばかり、逢て此の由語らんと歸
りて見れば、姉も又此の世を去りて跡もなし、最早尋ね
る人はなし、高野に上りし其の時に、憐み玉ひし御僧有
り、外に便は泣くばかり、亦も高野の荻萱に、庵尋ねて

御弟子にと、乞はれて荻萱是非もなく、共に連れ立ち國
々を、修業なしつゝ、信濃なる國に住居を定めつゝ、子弟
と名乗るばかりにて、親子地藏と唱へよと、遺言し給ふ
ぞ哀れなり、信濃に名高き善光寺、石童寺の本尊に親十
地藏の御在しますなり、嗚呼親子の縁は斯迄に、切つて
も切れぬものなれば、今は昔しの物語、南無や大悲の地
藏尊、南無や大悲の地藏尊。

●吹雪の敵

高吟「力山を抜き氣世を蓋ふは、わが北門の鎮めなる、歩
 兵第五聯隊なり萬事巴と降りしきる、雪を馬前の塵と見
 て、拂ひつ進みし二百餘騎明治三十より五とせの、初月
 末の東雲に、鋒とり立たる霜柱、馬の蹄に蹴てつ、向
 ふはいづこ雪の城、田代をさしてぞ急ける、ユリ「後れ先
 だつ世の人は、幸か不幸か古畑に、過てぞ來る田茂木野
 の、眞白に染て大峠、小峠風吹きまくる、吹雪の音は武
 士の、とりし弓弦の音の如、射出す白羽のその矢より、
 射抜ば射ぬけ我腕を、氷の劍霜の鎗貫かば貫きて見よ、

忠勇義烈の此腹を、如何なる艱苦も大君の、御爲と共に
 國の爲め、クズレ「進め」と下知すなる劍光雪にかゝや
 きて、威風するどき勇將の、下には弱卒有るべきぞ、溜
 まき返へす雪の足、蹴るや吹雪の音すさまじく、霧の礎
 雪の丸左手に拂ひ右手に受け、いどみ戦こふ其の内に、
 寒氣骨や切りにけむ、凍傷破れほとばしる、血潮は雪も
 色を變へ、ひるも模様も暫時にて、なほ操り出す雪の軍、
 幾重ともなく取り圍み、あやめも別かすなりにけり、
 高吟「猛虎におくれぬ將卒も、終ひにやすらふ燧山、燃さ

ぬ妻木も濡果て、雪の露營に夜を深し、低吟「假夜の夢も結びかね、明けゆく空はなほ白く、積れる雪にとざされて、安木の森も長森も、近しと聞けと乗る騎は、倒れくゝて進みかね、無念やる方なくも、再たび茲に日はくれぬ、起き出見ればあなあはれ、篋深に立ちし矢の如く、髪も手筋も凍り結め、眼を開き齒を噛みて、あへなくなりし兵も有り、國の爲め雪と戦ひ倒れても、偉勳は高し陸奥の、弓矢八幡神かけて、今日を限りの武運をも守らせ給へ、我れは今最後の隊伍とのへて、亂れぬ列を世に止

とめ、魔軍の圍を衝破り、斃れて後ちに止まんのみ、高吟「來れと叫ぶ隊長は、満身總べき膽ならん、かゝる時にも我軍紀、亂れはせねどおのづから、遅れし兵はたちまちに、崩雪の下に埋められ、進みし兵は崖に落ち、跡に附添ふ下士卒の、頼み切りたる隊長も紅蓮の氷にとちられて、ユリ呼吸さへ通はずなりければ、親に離れし雛鳥の、尾羽打かれし心地せり、腸凍りて死ぬるとも、我が隊長は棄てがたく、纏へる毛布脱きとりて、屍にかけし下士卒の、心のうちこそ健氣なれ、あはれ今はのきわ

までも、身は忘れても忘れざる、忠義の道の一線に、思ふ心は深けれど、雪千丈もなほ深く、八甲田山もなほ低し、

風是如刀雪如矢

銀城一夜將星墜

孤軍欲破苦寒圍

二百雄魂呼不歸

嗚呼陸奥の第五聯隊雪の魔軍と戦ひて、彼れが包圍に墜ちぬれど、たてし偉は敷島の、日本心の花ならむ、あやに畏き大君は、御衣の袖を絞らせて、慰問臣を遣はされ、大夫丈なれや、國民の猛き鑑とめでましぬ。

●錦の御旗

平吟「天照らす、日の影うつる真井の流、末清き瑞穂の國は昔より、武勇忠義の人多し、元弘元年の頃とかやユリ」後醍醐帝の三の皇子、大塔の宮と聞はしは、出家の身にてましませど、父の御爲國の爲め、義兵を擧げて逆臣を征伐せんと御企て、早くも賊に洩れ聞へしかば比叡の奥にも南都にも、身を置き給ふ事堅く、熊野を差して落ち給ふ、肢股の臣は誰々ぞ、低吟「赤松律師光林坊、木寺

相模武藏坊片岡八郎三河坊、平賀の三郎矢田彦七村上義
 光の九人にて、柿の衣に笈を負ひ、頭巾眉深に被りて、
 先達造りの山伏か、熊野参りに装ひて、龍樓鳳闕の人と
 なり、輕軒香車を出でまさぬ、雲上の人の御歩行は長途
 如何と御供の、人々危ふく思ひしに、社々の御宿り宿り
 くの御務め、露も怠り給はねば、勤修を積める山伏も
 見答むるもの更になし、ユリナガシ由良の港を見渡せば、
 沖漕ぐ船の舵をたへ、浦の濱木綿幾重ともなく波路に鳴
 千鳥、絶路の遠山渺々と、薄紫の藤が代の、松にかいれ

る磯の浪、和歌吹上の浦かけて、月にみがける玉津島、
 光を餘所に伏拜み、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習ひな
 り、兩を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀れを催
 す黄昏に、切目の玉玉に、着き給ひ、叢祠の袖を片敷きて、
 朝家の榮を祈ります、
 平吟「かくて十津川の戸野竹原、便りて暫時居給へど、爰
 にも長く有り兼ねて、高野の方へと落ち賜ふ、茲に姉加
 瀬庄司とて、賊の一味の士あり、宮を止めて申す様、此
 の道通し申しなば、鎌倉よりは罪せられん、さればとて

とも如何に何事ぞ一天四海の主に座します、上の御子朝
 敵を、征討なさん御門出でに汝等如き下郎等、かゝるふ
 るまひ致すかと、持ちたる旗を奪ひ取り大の男を搔ひ攫
 み、高吟「四五丈許りは投げ附けたる、其様は獅子の荒れ
 しに異ならず、此の怪力に恐れけん、姉加瀬庄司は一言
 半句も無くしてすゝみける、義光旗を肩に掛け、程無く
 宮に追附て、御前にひれ伏し、事の由具さに申上げれば
 宮の御喜び古の北宮勳が勇氣にも勝されりといと愛でま
 しぬ、之のみならず義光は、吉野の山の戦ひに宮に代り

宮に引引くは如何にも恐れ多ければ、錦の御旗賜はるか
 左なくば御友一人止めて證據にせんと云ふ、肢股の臣は
 一人だも、いがでか残し給ふ可き、詮方なくも御旗を、
 彼に取して虎の口、僅かに遁れ給ひける、低吟「斯る所に
 村上四郎義光は、草鞋の緒や切れにけん、遙かに後れた
 りしかば、宮に追附申さんと、足疾く急ぐをりしも有れ
 庄司に撞々行合しが、下人のもてる旗見れば、正しく錦
 の御旗なり、不思議に思ひ尋ねれば、事云々と答へける
 クツレ「義光聞きも敢へず、くわつと怒り打睨み、こは

て討死し、御旗に打ちたる日月の、光争ふ忠臣義士とに
へて、萬代迄も君に仕ふる人臣の、鑑みどころは仰か
るれ鑑みどころは仰がるれ、

● 國 船

ユリ上「雲に聳へし高山も、登らばなとか越わざらん、空
を浸せる海原も、渡らば遂に渡る可し、平吟「我秋津洲は昔
さす、東の極み離れ島、例へば海の只中に、浮べる船に
左も似たり、二萬方里の船の中、四千餘萬の乗組あり、

船の主の指揮を受け、文明海に進め行、水師舵取多かる
も、我等も舟子の一人なり、舟の行ては和田の原、八重
の沙路の遠ければ、早手逆巻く時もあり、高吟「高波ある
、折もあり、舟子の術を習はずば、早手高浪凌き得て、
思ふ港にいかで着べき、

● 小 敦 盛

低吟ユリ「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙
樹の花の色、盛者必滅の理を顯す、驕れるもの、久しか

らず、貴き人も遂に亡ぶる習あり、ユリ扱は此度源氏平家の戦に、平家方一族母衣大將の御内に、物の哀を止めしは、無官の太夫敦盛にて、諸事の哀を止たり、平吟敦盛扱も其日の出立は、何時に勝れて花やかに、先づ肌よりは梅香匂の肌寄せに唐紅を召されたり、練絹に種々の糸を以て秋の野の草盡し縫ひ出したる、薄紅梅の直垂に弓手のてつかい両面の脛當に萌をどしの鍔着て、くわ形打たる五枚甲の緒をしめ、鎌倉作りの御太刀はかせ、廿四差したる大中黒の征矢を負ひ、連錢葦毛なる駒に梨地

のまさ繪したる白ふくりんの鞍をかせ、御身かるげに召されしは、左も勇々敷ぞ見ねにける、御一門を初め同敷主上の御供召され、濱に下らせ給ひしが、敦盛御運の未の悲しさは、かん竹の用笛を、内裏に忘れ若上朗の悲しさは、捨てても御出あるならば、斯程の事はあるましに敦盛此笛を忘れ置く事は、平家末代の耻辱と、御召し取りに歸らせ給ひしが、斯様々に時刻を移す其暇に、御一門の御座船も兵船も、遙の沖に押出す、敦盛は力なくして鹽屋の方を心掛け、駒に任せて落ち給ふ、心の内こ

そ不便なれ、是は扱て置き茲に又、武藏の國の住人士の
 頭の旗がしら、熊谷の次郎直實は、此度一の谷の合戦に
 先陣とは申せども、未さまでの功名も、きはめず無念至
 極はなかりけり、天晴此處に勇士の通れがな、よき敵も
 あらばクツレ「押並べ引組んで、分取功名せばやと思ふ折
 節、敦盛を目に掛け駒引寄せ打乗り直實頓て大音揚げ
 て、名乗る様、高吟ユリ上「其許に落ちさせ給ふは平家方に
 於てもよき大將と見奉る、かく申す某は武藏の國の住人
 士の頭の旗頭熊谷次郎直實と申すものなり、源氏方に於

ても隠れなき敵にて候、きたなくも敵に後を見せ給ふも
 のかな、いざ引組んで御勝負候へ、如何に々と扇を揚
 げて招かる、敦盛は熊谷とは聞ながら、落つる味方の
 兵船に、心掛け更に耳にも聞入れず濱邊を差して急がる
 、頓て敦盛は遙の沖を御覽するに、御座船間近く奇せ
 ければ、敦盛は斜に悦び腰より日の丸の扇を出し、沖な
 る船を招がる、高吟「船中の人々其内に門脇殿は、最初此
 由御覽なされ、伊賀の平内左衛門基國を御側に召され、
 如何に基國あれを見よ衣掛武者の只一騎此船を招ぐは

左馬の頭行盛か、又は無官の太夫敦盛か、いづれか見よ
との御諛なり、茲に悪七兵衛景清参り、某見て参らせん
と、白柄の薙刀おつとり杖につき、甲をかたむけ磯邊の
方をツクぐと打守り、低吟ユリ「嗚呼痛しの御事やな、あ
なたにましますは、参議經盛卿の御子、無官の方にて渡
らせ給ふやな、御馬の毛色鎧の袖印に至るまで少しも違
ふ處はましまさぬ、嗚呼痛はしやとぞ申し上れば、門脇
殿聞し召し、敦盛ならば此船を、磯邊に寄せてと御諛な
り、水手楫取かしこまり、にはかにろかちを立直し船を

磯邊に寄せんとすれど此内より吹き續きたる北風の烈し
きになごりの浪は今日も立、風は競ふて浪は香車の如く
なり、白浪世界にはいき、真砂を天に揚げければ、宛然
雲の山の如くなり、小船こそ自ら弓手妻手にも押し廻さ
れるものなるに、殊に勝れし大船に、大勢は召されたり
次第くに出れども、高吟「漂ふ浪にせかれつ、磯邊に寄
すべき様は更になし、敦盛は此由見るより斯くては叶ふ
べからず、今は此を泳がせ船に乗らんと思召し、駒の手
綱をかいくつて、海中へサツト駈け入り、浮きつ沈みつ

一たん斗り出たりしが、駒逸物とは申せども、逆巻浪に
せかれつゝ泳ぎ兼ねてぞ見へにける、直實此由を見るよ
り如何に平家方の御大將、御座船遙に程を隔てたり、し
かも浪風荒くして、よもや渡らせ給ふまし、いざ引返し
て勝負候へ、返し給はんものならば、某射て參らせんと
弓と矢を打つがひそゝろに引てかゝりける、平吟敦盛は
落行く駒の手綱を引き止め、暫し思ふ様、若しも此處を
逃れ落ちんとせしに、斯く運の極まる上からは、若しも直
實がさび矢に射止められては平家末代の耻辱と思召し、

いざ茲にて勝負を致さんと合圖をなして駒の手綱を引返
し、海中よりサツト走け上り、染羽のかぶら矢おひちが
ひ、斯くこそ詠じ給ひけれ

高吟ユリ「梓弓矢を差しわけて引く時は返す心を知るか其
君

と遊ばし給へば、熊谷も心ある弓取なればハツト心に答
へ、双の鐙をけりして、頓て返歌に
いたづきのはやはづれんと思ひしに、

矢と云ふ聲にたちそとどまる

と返歌をなして心静かに待にける、

一に 段

低吟ユリ「去程に敦盛頓て打物の、鞆はづし、熊谷にツツレ
打て掛れば實直シツカト受止め、追つ追はれつ受けつ流
しつ、二騎並んで面を振らず切り結ぶ、未だ勝負も見ね
ざるに、敦盛イザ組まんと打物彼方へなげ捨て、かけよ
るを、直實共に持物なげ捨て、馬上ながらムツト組み、
互にかはす聲の内、一度に鞍ぶみを踏外し、兩馬が間に

ドツト落ち、上へ下へとかはしける、ユリナガシ「痛はしや
敦盛は、心は猛く勇めども強氣の熊谷物の數とも思はね
ば、敦盛を心安く取て押へ首をかゝんとしけれども、余
り手弱く思ひ、少し引くつろげ參らせて御相合を見奉る
に、薄げしように金黒々の有様は、さながら殿上人の年
の比十四五斗と打見わて、容顔殊に麗敷し餘り心の痛は
しさに、扱は中々平家方にては如何なる御公達にて渡ら
せ給ふやな、御名字名乗らせ給へとありければ、敦盛は
熊谷に組しかれ、低ユリ「世にも苦敷息をつき武藏の國の

熊谷は文武二道の士とこそは聞きつるに何とて合戦に法なき事をのたもふやな、我は天下の寵臣として雲閣の座に連なつて、詩歌管絃の道には長じたりし身なれども、此三歳が程は一門の運盡き果て、いとあこがれしが夫れ武士いさめる道をあらく承るに、それ武士の名乗ると云ふは互の陣に群がりて、やなくりゑびらを腰につけ互に打物拔持て、我は何國の某と名乗てこそ勝負を致すものなるに、我はまだ敵より押へられ其下より名乗ると云は今こそ初めて承る、熊谷とありければ、高吟「直實承り

仰は左なれど首を取り武藏に歸り、此直實が譽を顯はさん其爲に、其名字名乗らせ給へとありければ、敦盛詞に夫れは隠れもあるまし、只某が首を取り御邊の主の義經に見せ給へ、若も義經見知らずば蒲の冠者に見て給へ、蒲の冠者が見知らずば、此度一の谷の戦に、平家方生け取りのものども、多くあるべし、彼の者共に引向ひ、誰が首とも知らずば、其時こそ名もなきもの、首と思ひ、只草村に捨て給へ、熊谷とありければ、直實承り、ユリナカシ「扱は中々武士のいさめる道を委敷しろし召さるよな

世に物憂き者は、我等斗に候ひしが、君の御意に随ひ、御身を助けんとすれば、親と合戦、子と争ひ花の下なる半月の影、一夜の友を清風朗月飛花落葉と聞く時は、此度の戦に熊谷が参り逢ふ事は、又前世の事と思し召し、御名字名乗らせ給へ、只奉公の其忠に後生を吊ひ申すべしとありければ、敦盛は名は何時迄も名乗るまし、とは思へども後生を吊らはれん、其嬉しさに、我を誰とか思ふらん、ユリ上「我こそは葛原親王九代の後胤、門脇が二男参議経盛が末子、未だ無官は假りの名にて太夫敦盛とは

某なり、今年十六歳、軍は今日が初なり、左のみ物を尋ね給ふな、早や首取れや熊谷とありければ、直實も涙を流し、扱は中々無官の方にて御歳は十六才にならせ給ふやな某が一子小次郎直家も、今年歳は十六才、扱は御同年にましますや、平吟「御存の通り、直家も、一の谷の戦にささがけ致し、弓手のかいなに矢を射られ、某に向此矢抜いて給はれと申せしが、如何に直家弓取が敵と味方の其中で、心弱くて如何せん、若しも其手が深手ならば駒より下りて自害せよ、薄手ならば敵と引組んで打死致

たせ士の頭の名をけがすなと、ハツト睨みしが、其時某
 方を一目見て、敵の陣所に駆け入るを、後姿を見た斗り
 嗚呼今二目とは見ざりけり心に掛るは親心、經盛卿も今
 日玉の様な若君を、磯邊に一人御殘し、嘸ぞや歎かせ
 給ふべし、高吟ユリ「哀れ此直實がつれなき命長らへて、武
 藏に歸り直家も打たれたと云はい、誠の母が歎くべし、
 哀れ貴さも賤さも、子を思ふ道に迷ふとは、嗚呼今身の
 上に知られたり、我子小次郎に思替へ、又もよく御
 相恰を見奉るに、盾は娟妍たり、兩の髪は秋の蟬の羽に

たとへ、傳へにし繪空やるい山の形に相同し是は古業平
 の片野の野邊のかり衣、袖打拂ふ雪の下、すいたと紅顔
 きんしのよそほひ、此若君の御姿、繪に寫すとも争ひで
 か筆には盡し難くぞ見ねにける、平吟「直實思ふ様此君一
 人打奉るとも、千年の齡は保つまし、末代迄の物語りに
 助けばやと思ひ、如何に若君平家方にて仰せらるべき事
 は武藏の岡の熊谷と組んで候ひしが、我子小次郎に思ひ
 かへ、助け參らせ候と、御父經盛卿に能く御物語候
 へと、云ふより早く引立て、鎧に付いたるちり打拂ひ、

駒に打乗せ奉り、直實共に駒に打乗りて、五町斗は見送しが、早後に関の聲ドツト揚げ誰ならんと見返せば、弓手の方には森田平山控へたり、妻手の脇には虎江殿續て佐々木四ツ目の紋の旗を押たて、上の山には御大將九郎判官源の義經の白旗を靡かせ、膝元に取ては、先一番に武藏坊辨慶龜井片岡伊勢駿河源氏の一族聲々に、武藏の國の熊谷は敵と組んで候ひしが、已に組敷ながら助くるは必定逆臣に覺へたり、二心あらば熊谷共に打取れと、聲掛られて、ユリ上「直實詮方なくも又も扇を揚げて招き

よせ、如何に若君あれを御覽候へ、如何にもして御身一人は助け參らせ度は候へども、味方の軍勢雲霞の如く満々たり、よもや逃らせ給ふまし、哀れ此直實が手に掛け奉り、後の代の御追善を營み申すべしとありければ、教盛も涙を流し、低吟「夫れ武士は、兼て戰場に赴きては、なき身と思へども、此處に逃れ落行く先にて、若も賤しきものゝ手に掛り、面をさらさんは無念なり、左程義理ある武士の手に掛り死する命はおしからず早首取れや熊谷と、西に向て手を合せ覺悟定めておはします、さしも剛

なる熊谷も、いづくに太刀を立つべくとも覺へず、もと下
 暫しが程は途方に暮れておはします、左れど又やぐら番
 所の前なれば、斯くては叶ふべからずと、猛く心を取り直
 し、又も馬上ながら引組んで、敦盛を兩馬の間に引おろ
 し花の首をみづもたまらず、打落す、鬼をあざむく熊谷
 も、心も亂れ氣を絶て、暫しが程は死骸に取り付き、涙
 に打伏し泣きささけぶ事限りなし、去れど又弓矢取る身の
 哀れにやと、漸々心を取り直し、頓て死骸を引立見るに
 鎧の引合せ弓手の脇に巻物一卷差されたり、妻手の脇に

はかん竹の御笛扇を添へて差されたり、彼の巻物を開き
 見るに、敦盛の都落ちの事委敷記し召されたり、頓て敦盛
 の死骸を葬り奉り、彼の御笛巻物扇を取りて、高吟、駒引
 寄せ打乗り大音揚げて呼はる様、平家方無官の太夫敦盛
 を、武藏の國の熊谷が打取つたりと、勝鬨ドツト揚げ、
 陣所差して引て行く、頓て敦盛の首を義經公御實檢なさ
 れ後は直實に賜はる、直實殿は弓矢を捨て、もとより切
 て武士も捨て、妻子に離れ世を逃れ、鎧の袖を墨に染め
 新黒谷に引籠り、法念上人の弟子となり、其名蓮生法師

あり、積悪の家には餘殃あり、尤慎むべきは此道なり、
 茲に薩隅三州の御大守、島津修理の太夫源の義久公と申
 し奉るは、忝なくも清和天皇の御苗裔鎌倉の征夷大將軍
 源の頼朝公の御子左衛門の尉忠久公より以來、十六代目
 の御嫡孫なり、低吟「誠に文武二道の名將にて、上を敬ま
 ひ下を撫で、仁義正敷ましますば、靡かぬ草木はなかり
 けり、御舍弟には兵庫の頭忠平公左衛門の尉歳久公、中
 務大輔家之公とて何れも劣らぬ文武の名將なり、其の外
 御家の子郎等に至る迄譜代の好みを忘れず、皆忠勤を勵

と様を換へ、三歳が程は終夜、百萬邊を唱へ敦盛の追善
 を營みける、これも敦盛最後の時一言の言葉のかはしあ
 る故に、武士の情もあるぞかし、世の中は何と聞ても、
 唱ても憂は世の中つらきは敦盛、義理は熊谷、物の哀れ
 を留めしは蓮生法師の跡を歎きて、諸事の哀れを止めた
 り、

●木崎原(初段)

平吟ユリ「情々世間の現象を観するに、積善の家には餘慶

ませば、古今稀なる御果報と、近國他國の者までも、羨まざるはなかりけり、ユリ上「是れは扱置茲に又、大職官鎌足公の御末に、伊豆の國の住人伊藤入道若心が末孫に伊東左京太夫義祐迎、弓取一人おはします、しかも其の比日向國の都の郡に住み給ふ、其心飽迄不敵にして、仁義の道を學ばず、下を憐む心なく、只我が意に任せて舉動へば恐れぬ者こそなかりけれ去れば古人の言葉にも、君臣を見る事手足の如くするときは、臣君を見る事腹心の如くす、又君臣を見る事土芥の如くする時は、臣又君を

見る事只寇讐の如くす、曰く義に従ふ時は聖なり、諫に従ふ時は賢なり、然るに義祐道に違ひし有様を、譜代好みの家臣共、諫言すと雖會て用ひる事なく、却て恨み遠ざかる、心の内こそ淺増しや、大欲心の余りにや、大隅薩摩に發向し、我三ヶ國の主となりて、子孫長く榮華にさかねんと、明暮手だてを廻らせど、飯野の城には兵庫の頭忠平公は智仁勇の御大將なれば、中々小勢を以て叶ふべき様は更になし、去れば球摩の城主相良に加勢を乞はん迎、家の子に伊藤加賀の守祐安を近づけ、事の様子

を云ひ含め、相良方へぞ遣はしける、祐安かしこまり直ぐに球摩を差して急がる、頓て球摩にもなりぬれば、案内を乞ふて内へ入り、頓て相良に對面し、祐安彼の事頼みければ、相良返答にようこそ御出候なり、必ず御加勢申さんと、さも潔く返答し、先は門出を祝はんと、酒を様々進めつゝ、約束違へぬ其爲めに、黄金作の太刀一振、加賀の守へぞ引かれける、祐安悦ぶ事限りなく、約束かたく相きはめ、日向を差してぞ歸りける、平吟頓て大將義祐に此由斯くと申上れば、義祐悦ぶ事限なく、家

の子郎等を相集め、内議評定取りくとなり、茲に野尻の城主、福永丹波守祐友は、兼て仁義を守る勇士なりしが少しも憚る處なく進め出て申す様、某思案を廻らすに、彼の島津殿と申すは、辱なくも清和天皇の御末多田の満仲より以來、弓矢の家に譽を取り、政道かたくましませば、御家の子郎等に至る迄、心を變ずるものは稀にも聞ざる處なり、之れは大敵の別敵なり、御當家の兵共と申すは、譜代の士少くして、皆方々の借武者なり、殊に相良の何某は、一方心の表裏と承る、無二の味方と云ひ難

し、小勢を以て大敵の國へ、御働さ給はん事は、蟻蚋が
斧を以て龍車に向ふが如なり、事新敷申す事にて候はね
ど、御先祖祐高公は、島津久豊公を御智に取り給ひ、其
御威光を以て、日向の國十一ヶ所を打平らげ給ふ、斯様
に榮花をさかへ給ふ事、之れ一重に島津殿の御恩なり、
恩を得て恩を知らぬは、木石に相同じ、之れは佛神三寶
もにくしと思召さるべし、先づ我々共が所存には、島津
殿の御旗下となり給ひ、先陣の御働さ、忠義を盡させ給
ひなば、九州残らず島津殿の御手に入るべし、其時こそ

二ヶ國も、三ヶ國も島津殿より賜はるべし、左ある時は
御家永く御子孫繁昌たるべき事、何の疑ひが候べき、ま
づ此度御合戦の思召は、止めさせ給へ、平に々々と、福
永が理を盡して諫めければ、義祐はクツレ「固より無道人
なれば、以ての外に腹を立、今に初ぬ福永が賢人達の可
笑よ、理非は兎もあれ角もあれ、球摩に約束する上は、
早打立や者共とあわてふためき勢揃へ、先づ一番に伊藤
加賀の守祐安、同苗新三郎祐信を兩大將として、三千余
騎を相添へ、先陣に遣はしける、頓て義祐再び福永を御

前に召され、臆病至極の福永、我に再び對面無用々々と云捨て、頓て我身も二千余騎を引具して二陣に續きて出給ふ、天理に背く、此度の合戦危しと云はぬ人こそなかりけれ兎にも角にも義祐の心の中こそ愚なる、事ども何にたとへん方もなし、

二 一段

平吟去程に飯野にまします、兵庫の頭忠平公は、智惠第一の御大將なれば、兼てより伊藤家に忍の者を入れおか

る、早此由聞し召し、方々の味方々に飛脚を起して告げ給ふ、中にも菱刈表の軍兵共は之を聞き、勇み進んで人數を揃へ手配し今や々と待かくる、忠平を初め川上三河の守忠頼同助七忠堅上原長門の守梶山權左衛門尉高久高喜入津守忠政阿多長奇院盛淳山田新助黒木播磨の守村尾源左衛門松清等を先として、屈竟の兵共三千餘騎を相勝り木崎原の關所に伏せ置かれ、伊東方を菱刈表へ遣過し、跡を取切て皆悉く打亡さんと謀り給ふ、ユリ上之をば知で伊東勢、早加久藤迄は發向す、願ふ所の幸な

りよ、蕤苜表の兵五十騎百騎は此處の峰彼處の谷のつま
りつまりにはせ集り、弓鐵砲をはなちかけ、おめき叫ん
で攻戦ふ、痛しや伊東方は球摩の加勢を、今や遅しと待
けれど、相良何とか思ひけん、一騎の兵も出さねば、今
は前後の敵に取圍れて、途方に暮ておはします、平吟茲
に伊東の郎等、柚の木崎丹後の守政家とて、文武二道の
勇士ありしが、黒革おどしの鎧着て、びやくだん磨の脛當
に、兵庫くさりの小手を差し、くわ形打たる五枚甲の緒
をしめ、三十六差したる大中黒の征矢を負ひ、塗り込み

藤の弓を持、鹿毛なる駒のふとく逞しきに乗たりしが、進
み出で申す様、誠に人の心と河の瀬は一夜に變る習ひに
て、覺悟の前にては候へば、驚くべき事は更になし、か
ゝる時は命を惜しみ、生んとすれば必ず死す、思切て一
方を打破り、切て通ふれと諸軍に下知をなし、小林差し
て引て行く、亂れ軍の習ひにて、我先きに々と足を亂
して掛けて行く、跡より敵は群がり、續く慕ふて追駆る
丹後の守此由見るより、斯くては叶べからず、某一人跡
にふみ止まり、防ぎ矢射て人々を落し申さんと後陣遙に

茲に又、伊東加賀の守祐安は、心ならずも落る味方の大勢に誘れて、五町斗が程は落ちたりしが、頓て兎ある高みへはせ登り、大音揚げて呼ばゝる様、臆病至極の者共何國迄にぐるぞ返せ戻せと、味方の勢を大音にて呼ばゝれど、引立たる大勢の事なれば、更に耳にも聞入れず我先にくと足を亂してにげ行く、祐安思ふ様、我苟も伊東の家の子先陣の大將を承りながら、未だ一軍も利を得ず何の面目あつて再び古郷に歸りて、人々に對面せん、いざ打死せんと言つて思切り、駒の手綱を引返し、大音あ

げて名乗る様、茲に扣へしは伊東の家の子に、伊東加賀の守祐安と申すものなり、君恩を報せん其爲に討死致すものなり、我と思はん者あらば、掛れくと呼ばれば、島津方より澁谷上總の守國重、今の言葉を聞付けて、ユリ下嗚呼やさしくも返し給ふものかな、某は古へ北原が郎等に澁谷上總守國重と申す者なり、日比音にも聞かせ給ふらんと云儘に、馬上ながらムツと組み、互にかはす聲の内、一度にあふみをふみ外し、兩馬が間に堂と落ち、上を下へと返ける、國重危く見へければ、國重が郎等二

人馴せ續く、祐安固より大力なれば、二人の者共かいたをかいつかんで、此處彼處へカツハとなげ捨て、又も國重を取り押へ、首を搔んとする處を弟軍八國直兄を打たせて叶ふまじと、弓手妻手よりつつと寄り、つかもこぶしも通れくと、三刀差して弱る處を、國重下よりはねかへし、遂に首をぞ打落す、祐安が歳を申せば、未だ惜しがる歳の三十一、惜しまぬ者こそなかりけれ、其年の年號申せば元龜三年、頃は五月廿四日なり、此人々の手柄の程は、天晴武勇の譽れやなと、皆一同に感じける。

三 段

低吟去程に、加賀の守が郎等二人打洩されたて、新三郎に近付き、斯様くと告げれば、新三郎之を聞き、以の外に打驚き、扱は中々祐安殿、最早打死とかや、兩大將の者共が、一人は打たれ又一人、古郷に歸りて詮もなし、いざ打死せんと、付従ふ者共は、命全ふ存命て、義祐公の御先途を見奉るべし、暇取らす是迄なりと云捨て、ユリ駒の手綱を引返し、島津方の大勢に打向ひ、大

音揚げて名乗る様、茲に進みしは、伊東の家の子に、伊東新三郎祐信と申す者なり、君恩を報せん其爲に、打死するものなりと、大勢が中へ面も振ず割て入り、爰を詮度と世に烈敷、火花を散らして戦ひしが、向ふ敵七八騎は取り、其身も數ヶ所疵を蒙り、迎も叶はぬ事なれば、駒より飛下り自害せんとする處を、敵勢すき間もなく馴せ来る、祐信心得たりと云ふ儘に、真先に進兵諸ひざ薙て切伏する、二番に續く士と引組で、差し違ひ遂に空敷なりにける、平吟「祐信が死骸を引立見れば、帶印に伊東新

三郎祐信と名印あり、未だ惜かる歳の十九歳、惜まぬ人こそなかりけれ、是は扱置茲に又、柚の木崎丹後の守政家は、只一人後にふみ止まり、大音揚げて呼ばゝる様、島津方の御内に名ある兵候は、申上度仔細候、此處へ々々と招かる、勝に乗たる島津方の軍兵共は、我先きに討取り功名せんとひしめくを、丹後守此由見るより、理非をも知ん奴輩共其處立退けと云ふ儘に、さへぎる敵を弓手妻手に切拂び、忠平公の御旗本近く、真一文字に駈け来る、忠平公此由御覽なされ、彼は名ある兵、仔細を

問へとのたまへば、御旗本の兵丹後の守を中に取圍む、丹後の守は、駒より飛下り、打物彼處になげ棄、暫し尋問してぞ居たりしが、平吟如何に方々鳴をしづめて聞き給へ、我等が主の義祐は、島津殿の御恩を蒙り、斯様に榮花に榮へし人なれど、かゝる逆心を企て、天理に背き候へば、此度の戦皆悉く敗軍す、家の滅亡遠からず、我々共も島津殿に降参申度は候へど、賢臣は二君に仕へず本文の其詞に耻て、ユリナガシ「只今茲にて討死仕る、某が幼少の一子候を忠平公に頼み奉る、哀れ貴さも賤しきも

子を思ふ道に迷ふとは、嗚呼今身の上に知られたり、此事申さん其爲に、此處迄参り候なり、今は思ふ事もなし首を召され候へと、甲を抜きすて又尋問してぞ居たりしが、忠平公聞召し、ユリ下「こは哀れなる事共哉、一子の處は扱置、汝降参仕れ、平にくゝとのたまへば、丹後の守此由承り、こは難有き忠平公の御誼かな、去あらば御暇申さんと、腰の添差抜き持て、ふるの鎖を搔き放し、あしたの露と消ぬにける、未だ惜しかる年の卅一、惜しまぬ人こそなかりけれ、之れ等を初めとし、伊東方に於

て、其の名を記すに、先〇〇〇〇伊東加賀の守祐安同苗
 新三郎祐信、伊東左衛門の尉、長倉勘解田、落合源左
 衛門、柚の木崎丹後守政家、伊東權之助、伊東源三
 郎、これらは皆大將なり高吟「其外一騎當千の兵共百
 六拾余人は一足も退かす、皆聲々に名乗つて打死す斯様
 々々に皆打死し、あなたこなたの時刻を移す、其暇に大將
 義祐は、虎口を逃れ、都の郡へ落ちて行く、島津方の軍
 勢は、勝に乗て追かくる、忠平公此由御覽なされ、勝に
 乗て長追しては、悪しかるべし、先づ引取れや者共、諸

軍勢に下知をなし、飯野の城に引かせ給ふ、茲は川上上
 原を初め、家老の面々進み出で申す様、臆病神の付きた
 る伊東勢、何程の事をか仕出すべき、此序に境目御越し
 御働きも候はい、手に立つものは候ましと、勇み進んで
 申上れば、忠平公聞し召し、其儀尤さりながら、窮鼠却
 て猫を噛み、黄犬却て虎を喰むと云ふたとへあり、伊東
 方も未だ名ある兵多くあるべし、たとひ亡ぶと雖ど、味
 方大勢損すべし、勝て甲の緒をしめ、時節を待てとのた
 まひて、境目堅く相守り、御用心は隙もなし、茲に又伊

東義祐は、大隅薩摩に掛け、數度の戰に家の子郎等を残り少なに打なされ、今一度境目打破り、數多の城を攻め破り、會稽の耻を雪がんと、明暮手だて廻らせど、味方の者ども皆臆病神に誘はれて、妻子を隠し落ち仕度をぞしたりける、平吟「茲に又福永丹波の守助友は、此由つくぐと見て、伊東殿の滅亡すべき時節は、早此時なりと思つひ、我度々諫言しけれども、諫言耳にさかひ良薬は口にながき習にて、却て不興蒙る事は無念至極に思へども之れは又前世の事なれば、恨める事は更になし、

傳へ聞けば、伊東も未だ前非を悔ひ給はず、此度又大隅薩摩に發向せんと企ある由、家の滅亡遠からず、君辱めらるゝ時は臣以て死すと云ふ事もあり、家臣として今一度諫めざらんは、耻の至りなるべしと、一通の諫言狀を認め、ワザト苗字をかゝずして、夜半にまぎれ、伊東の館に忍び入り、門に差し置いて宿所差してぞ歸りける、兎にも角にも、福永が所存の程は、天晴勇士の舉働かなと皆一回に感じ入る、

● 俊基朝臣東下り

平吟ユリ下「俊基朝臣は七月十一日に、六波羅に召捕れて、
 關東へ送られ給ふ、再犯赦さるは、法令の定むる所な
 れば何と陳するとも赦されじ、路次にて失はるゝか、鎌
 倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ
 出られける、

ユリ「落花は雪にふみ迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦
 着てかへる嵐の山の秋のくれ、一夜をあかすほどだにも
 旅寝となれば物うきに、恩愛のちぎり浅からぬ、我ふる
 里の妻子をば、ゆくへも知らす思ひ置き、年久しくも住

みなれし、九重の都をば、今を限りかへり見て、思はぬ
 旅に出でたまふ、心の中ぞあはれなる、

ユリナガシ「憂をばとめぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末
 は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海に漕
 がれゆく、身を浮船のうきしづみ、駒もといろの踏みな
 らす、勢多の長橋うちわたり、行きかふ人にあうみ路や、
 世をうねの野になく田鶴も、子を思ふかと哀れなり時雨
 いたくもる山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原
 や、笹わくる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、涙

に曇りて見わわかず、ものを思へば夜の間にも、老蘇の
森の下草に、駒をとめてかへり見る、故郷を雲やへだ
つらん、番場醒ヶ井かしは原、不破の關屋は荒れはて、
猶もるものは秋の月、いつか我身のおはりなる、熱田の
八劍伏しおがみ、潮子に今やなるみ瀉、傾く月に道見
て、明けぬ暮れぬと行く道の、未はいづくと遠江、濱名
の橋の夕潮に、ひく人もなき捨小舟、沈み果ぬる身にし
あれば、誰かあはれとゆふまぐれの入相なれば今はとて
池田の宿につき給ふ、

高吟元暦元年の頃とかよ、重衡中將の東夷のために囚は
れて、此の宿につきたまひしに、

東路の丹生の小屋のいぶせきに

ふるさといかにこひしかるらん

と長者の女がよみたりし、之の古のあはれまで、思ひ残
さぬ涙なり旅館の燈かすかにして鶏鳴曉を催せば、匹
馬風に嘶きて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越ゆけ
ば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天
を望みて、もむかし西行法師が命なりけりと詠じつゝ、二

度越あたらわしあともまでも、羨あたらしくぞ思はれける、隙ひま行く駒うまの
 足あし早はやみ、日ひ已こに亭午ていごに昇のぼれば、餉かかしまるらする程ほどとて、輿こし
 を庭前ていぜんに昇かきおろし、轆なぐを叩たたきて警固けいこの武士ぶしを近ちかづけ、宿
 の名を問とひたまふに菊川きくがはと申まをすなりと答こたへければ、承久しやうきう
 の合戦がっせんの時、院宣書いんせんきたりし答こたによりて、光親みつちか卿東へ召
 下くだされしかば、この宿しゆくにて誅ちゆうせられしとき、

昔むかし南陽縣菊水なんようけんのかきくすい

今いま東海道菊河とうかいどうきくがは

汲下流而延齡かりちをくんでよはひをのぶ

宿西岸而終命せいかんにやどつていのちをとおふ

と書きたりし遠とほき、昔むかしの筆ふでのあと、今は我身わがみの上うへにあり

哀あはれやいといとまさりけん、一首しゆの歌を詠よじて宿しゆくの柱はしらにぞか
 くれける、

いにしへもかゝる例たとへをきく河かはの

同おなじながれに身みをやしづめん

大井河おおいがはを過すぎたまへば、都みやこにありし名なを聞ききて。龜山殿かめやまのどの
 の行幸ゆきゆきの、嵐あらしの山やまの花盛はなり、龍頭りゆうづつ卷首まきづつの船ふねに乘のりり、詩歌しか
 管絃くわんげんの宴うたげにはべりし事ことも、今はふたいび見ぬ夜よの夢ゆめとな
 りぬと、思おもひつついけ給たまふ、島田藤枝しまだとうじにかゝりて、低吟ひげん岡おか
 部べの眞葛裏まきす枯かて、ものかなしき夕暮ゆふぐれに。宇都うつの山邊やまのへを越こ

に行けば、葛楓いと茂りて道もなし、昔業平の中將の住
 家を求めて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなり
 けりと、よみたりしも、かくやと思ひ知られたり、清見
 淵を過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守
 に、いと涙を催され、向はいづこ三保が崎、興津蒲原
 打ちすぎて、富士の高嶺を見たまへば、雪の中より起つ
 煙、上なき思ひに比べつゝ、明る霞に松見わた、浮島が
 原をすぎ行けば、潮干やさしき船浮きて、おりたつ田子の
 みづからも、浮世をめぐる車がへし、竹の下道ゆきなや

む、足柄山の嶺より、大磯小磯見下して、袖にも波はこ
 ゆるぎの急ぐとしもはなげれども、日數積れば、七月二
 十六日の暮ほどに、鎌倉にこそつきたまひけれ、

●蓬萊山

ユリ上「目出度やな君が惠は久方の、光り長閑き春の日に
 不老門を立出て四方の氣色を眺むれば、峰の小松に雛づ
 るすみて、谷の小川に龜あそぶ、ユリ君が代は千代に八
 千代にさいれ石の、岩はとなりて苔のむすまで、命なが

らへて雨堆あめつちくれを破らじといへば、又堯舜けうしゆんの御代みよもかくあら
ん、かほど治る御代みよなれば、千草萬木とこぞらじゆ五穀成就ごこくじゆして、上
には金殿樓閣ちゆうかくの蔓いらかをならべ、下には民のかまどを厚あつくし
て、仁義じんぎ正しき御世よの春、蓬萊山ほうらいざんとはこれとかや、高吟たかぎん
君きみが代よの千歳の松は常磐色、かはらぬ御代みよの例ためしには、天
長地久ちやうぢくと、國くにも豊ゆたかに治りて、弓ゆみは袋ふくろに劔けんを箱はこに納め置く
諫鼓かんこ苔深こけふかくして、鳥とりもなか／＼驚おどろくさまぞなかりけり、

● 城しろ 山やま

ユリ上うへ「夫達人だいくらんは大觀たいくわんす、拔山蓋世はつざんがいせの勇あるも、ユリ下した「榮枯えいこ
は夢ゆめか幻まぼろしか、大隅山おほすみやまの狩かりくらに、眞如しんによの月つきのかけ清きよく無
忘無想むわむさうを感かんずらん、高吟たかぎん「何を怒るや憤いりを、俄いつに激げきす
る數千騎たうせんき、いさみに勇いさむ隼はやり雄をの、虎騎この勢いき一徹いつてつに、留とど
りがたきぞ是非ぜひもなき、唯身ただみ一つを打捨うちすて、若殿原わかにに報
ひなん、明治十年めいしじゆんねんの秋あきの末すえクツレ「諸手しよての軍ぐんは打破うちやぶれ、討
ちつ討うちたれつやがて散る、霜しもの紅葉くわなの血ちの、血汐ちしほにそめど
かへり見ぬ、薩摩さつま猛夫たけをのをたけびに、紅散べにる玉たまは板屋いたやう
つ、霰あられたばしる如ごとくにて、面おもてを向けん方かたぞなき、木魂こたまに

ひいくときこのころ、百の一雷時に、落つるが如き有様を
 隆盛は見てほくそ笑み、ユリ上「あな勇しの人々や、亥の
 年以來養ひし、腕の力もためし見て、心に残る事もなし
 いざ諸共に塵の世を、脱れ出んは此の時と、唯一言を名
 残にて桐野村田を始めとし宗族のやから諸共に、煙と消
 ねし大丈夫の、心の中をゆゝしけれ、

こんふんとうかこみをついてかへる
 孤軍奮闘衝圍還

りていそまいへきのあひだ
 一百里程壘壁間

わがけんすてにおれわからまたをる
 我劔既摧吾馬斃

しうふうほねをうづむこけうのやま
 秋風埋骨故郷山

官軍之を望み見て、低吟ユリ「昨日迄は陸軍の大將と、仰が

れて君の寵遇世の覺いたぐひなかりき英雄も、今はあへ
 なく岩崎の、山下露ときわはてい、移ればかはる世の中
 の無情を深く感じつい、無量のおもひ胸にみち、唯悄然
 と整隊し、目と目を見合すばかりなり、折しもあれや吹
 き下す、城山松の夕あらし、岩間にむすぶ谷水の、無情
 の色も何となく、悲鳴するかときなされ、洋服の袖を
 ぬらすらん、

● 春の調

島津久光公作歌

平吟「新玉の年の始めの喜や、むかし變らず吹きあくる笛
 と鼓の音までも春のしらべに聞えつゝ、玉だれゆらぐ風
 たちて、舞の袂も長閑なる神の井垣も老松も、枝をもつ
 らぬ、葉をかさね、大夫の影たかく、齡を君にゆづる葉
 の常盤の色ぞたぐひなき、軒端に咲ける梅が枝も和泉式
 部のゆかりとや床しくかほる窓のうち、ふみ見る袖にう
 つりくる、好文木の名を恥すまた高砂住の江の松に相生
 の尉姥と、いもせの契り末ながき、千代のためしに引か

れつゝ、四方の海原浪なきて、ユリ下「吹くも静けき時津
 風枝もならさぬ御代の春、千秋樂には民を撫て、萬歳樂
 には命を延る樂みも年ごとの今日汲かはす盃に、君と御
 國を祝ふなる、松ばやしこそめでたけれ、

笠置の御夢

加藤嚴夫作歌

低吟「あな畏きや、おほ君の、夢にみなみの楠は、一天萬
 乗の君の御召にあづかりて、時を移さず笠置の行宮にぞ

なれば、よしや官軍破るとも、大御心を艱ましぞ、臣な
 がらへて世にあらば、必ず賊を滅ぼして大御心を休めま
 すと、御受申してまかん出ぬ、さして行く笠置の山を出
 でしより天が下にはかくれ家もなし、一度は西の海邊に
 かくろひし、天つ日かげも後ついに、暗き雲霧おしひら
 き、めでたく還幸まします、わが大君の楯となり、わが
 大君の御船とも、なりてつかへし楠ぞ、臣のかゝみと語
 り傳へむ、

参りけるユリ上「帝は叡感斜ならず藤房の卿をいて仰出た
 されけるに逆賊北條高時は、奢に長じて天下の政をみた
 り、萬民塗炭の苦みを受く、しかのみならず暴威につ
 りて大逆を圖るに至る、今は天下の事をあげて卿に委ぬ
 速に逆賊を亡して叡慮を安じ奉れ、卿が策いかにくくと
 ありければ、正成謹むで勅答したてまつるは逆賊暴威に
 耽るとて、御心やすく思し召せ順を以て逆をうつ、勝すと
 いふの理あらんや、賊に匹夫の勇ありとも、これを計る
 はいと易し、無吟さはさりながら勝敗は、兵家の常の事

薩 摩 琵 琴 歌 集

明明明
治治治
四三三
十十九十九
年年年
五十一
月月月
廿十五
日日日
三再發
版版行
制

編輯者 町 田 櫻 園

發行者 東京市淺草區須賀町十八番地 林 甲子太郎

印刷者 東京市日本橋上橫町十六番地 富 山 利 三 郎



不 許
複 製

發 行 所

東京市淺草區
須賀町十八番地

盛 林 堂

253

575

發行所

東京市淺草區
須賀町十八番地
東京市淺草區
淺草仲見世

盛林堂書店
增田書店

印刷者 富山利三郎

發行者 同同區馬道町一丁目四號廿四番地
增田彦太郎

發行者 東京市淺草區須賀町十八番地
林甲子太郎

編輯者 町田櫻園

明治四十年九月三十日印刷
明治四十年十月九日發行

不許複製

文藝叢書

| | | | | | | | |
|-------|--------|-------|-------|------|-------|-------|------|
| 川柳名句集 | 俳句作法指南 | 俳句類題集 | 薩摩琵琶歌 | 新案なぞ | 都々一大全 | 考へ物大將 | 新福引集 |
|-------|--------|-------|-------|------|-------|-------|------|

各冊定價金貳拾錢 郵稅金貳錢

音樂全書

| | | | | | | | | | | | | | | |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|------|------|-------|---------|-----------|--------|----------|-------|--------|
| 尺八獨案 | 尺八速成自在 | 清樂雜曲自在 | 清樂獨習自在 | 清樂速成自在 | 西洋橫笛獨稽 | 清笛獨案 | 銀笛獨案 | 吹風琴獨案 | 手風琴獨習自在 | 以上三書定價貳拾錢 | 西洋橫笛獨案 | 銀附音樂隊組織法 | 手風琴獨案 | 附太鼓の打方 |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|------|------|-------|---------|-----------|--------|----------|-------|--------|

各冊定價金五拾錢 郵稅金貳錢

